

三つの石で地球が分かる —岩石がひもとくこの星のなりたち—

藤岡換太郎 [著]

講談社 (ブルーバックス)
発売日: 2017年5月17日
定価: 920円+税
ISBN: 978-4-065020159
A5版 (17.2 x 11.2 x 1.2 cm) 並製
224ページ

藤岡換太郎氏は JAMSTEC 在籍時に「しんかい 6500」に 51 回乗船し、太平洋、大西洋、インド洋の三大洋初潜航を達成した深海研究の大家であることはよく知られている。最近では、過去の研究経験に裏付けされた書籍の執筆も活発に行っておられ、これまでもブルーバックスシリーズの一般普及向けの新書として出版された、『山はどうしてできるのか』、『海はどうしてできたのか』、『川はどうしてできるのか』の 3 部作についても本誌でも紹介してきた経緯がある。

さて、前作から 3 年もあけずに発表された今回の新書のテーマは、なんと“石”である。“石”は我々の生活に満ちあふれており、一般人にとっては身近な存在ではある。例えば、“石の上にも 3 年”、“焼け石に水”、“石橋を叩いて渡る”のような日常の諺にもしばしば現れているその一方で、“石ころ”とも呼ばれ、蔑まれてもいる。ちなみに、一般人の認識している“石”とは、我々地質学者のいう“岩石”に相当し、さらに付け加えると、地質学者のいう“石”とは岩石の構成要素である“(造岩)鉱物”に相当するので、やや混乱してしまう。

私の子供は現在つくば市内の高校に通っているが、彼女が過去に習っていた中学理科の教科書にも 6 つの“石”が出現する。それらは、読者もよく知っている花崗岩、閃緑岩、斑れい岩等の深成岩、および流紋岩、安山岩、玄武岩等の火山岩である。これを「シンカ(ン)センハカリアゲと覚えるのだ!」と彼女に教えられた。このうち花崗岩と斑れい岩は、つくば市近郊の筑波山にも露出するから比較的身近で分かりやすいが、その他の“石”は茨城県内で実物を



見ることは難しい。おそらくこれを教える側のつくば市内の中学や高校の理科教員もそれほど“石”に詳しいとは私には想像しがたい。

さて、今回の藤岡氏の新書の教えでは、地球の歴史を考える上で 3 つの“石”について知っていれば十分とのことである。3 つの“石”とは、緑色のマントル起源の△△岩、黒色の海洋地殻起源の□□岩、そして我々の居住する陸地を構成する白い○○岩なのである。詳しい話はここではネタバレにもなるので控えるが、私には、この論理が実にシンプルかつ明解に思える。本書では、この 3 つの“石”を基軸として、その他の岩石や造岩鉱物(珪酸塩鉱物)について、さらに地球史についても分かりやすく解説されている。

私見として、この新書は地質のプロというよりは、これまで“石”に馴染みの無い人、特に高校生の皆さんにこそ読んで頂くことをお勧めしたい。本文中には藤岡氏好みの多少マニアックな専門用語が頻発するし、第 6 章の地球の進化の記述は専門過ぎて少し理解しがたいかとも思われるが、授業で「地球の構造」、「火山活動と火成岩」の単元を学ぶ前にこの本の第 5 章までを一読しておくことで、より理解度が増すことであろう。たとえばカレー鍋に例えたボーエンの結晶分化作用の説明は、実に見事である。但し、“石”や“石”の薄片写真は全て白黒であることは新書の性格として仕方が無いことかも知れないが、もしカラーで示されていたら、さらに読者を魅了する書となっていたかもしれない。

(産総研 地質調査総合センター 地質情報研究部門 七山 太)